

How should we spend money?

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/8576

いかに金を使うべきか

How should we spend money?

金沢大学医学部第一解剖

井 関 尚 一

今年の夏、アポロ宇宙船月着陸25周年を報じていた。スプートニクから月着陸までのわずか10余年に比して、その後の宇宙開発の歩みは遅々たるものであり、どうやら私自身が生きているうちに月に行くのは夢に終わりそうである。このことは、宇宙開発等の巨大科学の命運が、その時々、国家の価値基準による金の使い方次第でいかようにでも左右されるという事実を示している。宇宙開発をやめて社会福祉や途上国援助に金を回せというたぐいの議論にはくみしないが、研究予算という小さなパイをどのように分配するべきかは重要である。

最近の文部省の金の使い方を見ていると、少数の研究者に多額の科研費を集中させる一方で、誰でも使える校費の金額は据え置く、すなわち実質目減りを是とする方針のようである。重点的な予算配分により効率的に成果を挙げよ、金を貰えない者は研究などせず教育に専念せよという趣旨と受け取れる。本学においても、特定の研究者がいくつもの部門で多額の科研費を重複して獲得している。かれらが先端的な研究で優れた業績を挙げ、また魅力あるテーマで予算申請をしている努力を認めるのにやぶさかではない。しかし巨大な機器がなくては研究できない実験物理学等の分野と違い、生命科学はまだまだ個人のアイデアと家内工業的な実験で成果が出せる分野である。さらに現在の日本の制度では、研究費は人件費に転用できないし、公務員である研究者の定員は各教室に一律に割り当てられる。すなわちいかに金がある教室でも研究手段や研究者を独占することはできないわけである。国立大学の理系研究者の間で能力や意欲に極端な違いがあるとは思えないから、特定の教室に研究費を集中させるより複数の教室に分散したほうが、コストあたりの成果は大きいと思われる。この点は巨大科学の場合と異なる。また重点的予算配分には、研究者間に競争原理を持ち込んで研究を活性化させようという理念もあるだろうが、研究者の競争の動機は新発見の名誉にあるのであって、予算獲得が目的ではないから、いささかの外れである。

科学というものには確かに少数の独創的研究者によるブレイクスルーで発展する面があることは否定しない

が、仮にその人がいなくとも遅かれ早かれ同じ発見が他人によって達成されてしまうのも事実である。所詮研究とはひとつのパイを個人が各々好きな形に切り取る作業である。予算の重点配分でひとつの教室が潤うより、同じ予算を複数の教室に分けて皆がハッピーになるほうが良い。重点配分がもしすぐれたものなら、例えば金のない開発途上国でも国立研究所の一握りのエリートに研究費を集中すれば世界的な業績を挙げられる理屈であるが、事実はそうでない。科学研究においてもインフラの整備が重要なのであって、多数の教室が共に栄えることにより裾野が広がり、全体としての業績も上がるのである。そのためには、科研費よりも校費を増額せよと言いたい。研究をやっているれば雑然としたアイデアが色々浮かぶが、それらを試してみるのにいちいち科研費の書類を書くわけにはいかない、誰もがすぐに使える校費が十分にあることが新発見を生むのである。

もうひとつの有効な金の使い方は留学生を増やすことである。近年はどの科学文献を見ても日本人研究者の仕事が目白押しで同慶の至りであるが、日本人の能力が戦後急速に向上したわけでもないだろうから、これはやはり国が金持ちになったことに起因すると言ってよいだろう。戦後日本が貧しかったころから、アメリカは日本人をはじめとする外国人を向こうの給料と研究費でさかんに研究させてくれた。こちらにもありがたいし、向こうにとっても戦力になったものと思う。今度は日本が同じことをする番である。最近文部省による国費留学生奨学金や民間の奨学金が少しずつ充実しつつはあるが、まだまだ狭き門であり、私の教室なども過去4回にわたり国費留学生採用を申請しているがいっこうにかなえられない。基礎医学の教室では医学部卒業の入局者をほとんど期待できないから、今後は留学生を戦力とするしかないように思われる。日本にとっても、留学生のために金を使うことはすべてに優る国際貢献であろう。

以上、金も人も集められない一教室主任が日頃考えていることである。